



見すゞしやすい ちいさな幸せ

前住職

悲しいことですが、私たち人間の欲には限りがありません。それでついつい不平をいう。

新聞の人生案内欄に二十代の大学院修士課程で学んでいる学生さんの不満の声がのっていました。

彼の言い分はこうです。

「金と世間体にうるさい父親が大嫌いだ。その理由は、この先も研究生活を続けたいが経済的に問題がある。父は金に厳しく、博士課程進学後は全て自己責任でまかなくようにならざりと云う。同年代の多くはもう就職して経済的に自立している等、口うるさく云う。すべてをあきらめて就職するしかないのかと思い、憂鬱になり生きる希望が見えない。」

この悩みに対し相談相手の先生は言う。

「親が口うるさいと批判していますが、今まで経済的な心配をせずに、大学院に進学できていることにむしろ感謝してください。親はあなたに好きなことをさせ

る為のATMではない」と手厳しく回答していました。

日本が物のない貧しい状況から豊かな時代に向かうにつれて、目前のこと追いかけられて気持ちの余裕を失つていきました。それと並行して心の豊かさを大切にする文化も薄れてきたようです。薄れるとは気付きにくくなることです。濃い色に比べて薄い色のものは分かりにくいのと同じことです。

「してくれるのが当たり前だ」という自分中心の思いが常態化してきました。これでは感謝の念の出るはずがありません。当然の権利のようにイメージしてしまったからです。だから「してくれるのが当たり前なのに、どうしてしてくれないのか」という不満が募ります。それが学生の口から出てきたようです。親も子も一生懸命に生きているのです。

年を重ねることは実に有難いことであると感じています。若い時には伝わってこなかつた親の心が響きます。今も支えてくれている親族など、数多くの人々の思いも感じられます。

「しあわせ」は、自分の人生の一つ一つに「おかげさまです。ありがとうございます」と感謝できている事であるとしみじみ味わっています。このことを阿弥陀さまは私に知らせてくださいました。

いつものことがいつものように出来る事は「当然」ではありません。支えてもらっているからです。支えてくれる大地があるから立つて歩けるのです。

大学で学ぶのは義務教育ではない。親の愛情です。親の愛情に感謝できないのは、自分中心主義の考えに迷わされているからでしょう。「小さなしあわせ」を当然視して、「大きなしあわせ」だけに目を奪われて生きているのではなかろうか。

つまらない思いで人生を過ごすことになるのは他人のせいではありません。自分で

人間は物だけで生きているではありません。物の豊かさに目がくらみ、心の世界が見えなくなつたら大変です。仏さまの声を頂き忘れないようになつた

です。

南無阿弥陀仏

花まつり

春休みも終わりに近づいた四月七日、いたやど保

育園の園児さん三十六名、門信徒さんとそのお子様三十名が本堂にお参りくださいました。

人と人の交流を控えてきた約三年間。やつと顔を合わせることが叶い、成長した姿を見せてくれて嬉しい思いが募りました。

まずは、花御堂のお釈迦さまに甘茶をかけて、ひくち甘茶をいただきます。次に本堂で、いつくるかもしれない災害に向けて、日頃からも協力して助け合う気持ちやお友達との繋がりが大切！という絵本を大きなスクリーンに投影して大学生のお姉さんに読んでいただきました。

住職からは命の大切さをお話しいただき、園児さんは、可愛い合唱を私達に披露してくれました。そして、ささやかな手作りのおもちゃとお菓子を渡しました。幼い心に今日の一日が思い出として残っていただけますようにと思いま



がら、「また来年もお寺に来てね」と見送りました。本堂いっぱいに楽しい笑い声が響き和やかな集いとなりました。ありがとうございました。

信行寺門信徒会総会

四月二十二日（土）に門信徒会総会が行われ、昨年度の活動報告及び会計報告、今年度の活動と予算などの報告を致しました。

コロナ禍でなかなか思うような活動が叶わなかつたのですが、今年度は状況を鑑みながら活動を開いていきたいところです。また、役員改定の年度にあたり、新役員の方々の承認が行われました。

実りある一年になりますように、みなさまのご参加、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

また毎年、総会の出席記念品として、役員の多田清子様より手作りの小皿をお一人一枚進呈させていただいております。その年にょつて色味やデザインが変わり、集める楽しみを味わっております。ぜひ、来年度の総会もご出席下さい。



慶讚法要に参加して

上內智裕

三月三十一日、西本願寺で行われた親鸞聖人御生誕八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要に参加いたしました。信行寺を含む四ヶ寺の門信徒が一緒にバスで京都を訪れました。

京都市街に入るとバスの車窓からは鴨川沿いに満

ちに最初の訪問地である金戒光明寺に到着しました。金戒光明寺の紹介には、「十五歳で比叡山に登られた法然上人が承安五年（一一七五年）四十三歳の時お念仏の教えを広めるために、山頂の石の上でお念仏をされた時、紫雲全山にみなぎる光明があたりを照らしてからこの地に草庵をむすばれた。法然上人がはじめて草庵を営まれた地である。」とあり、落ち着いた雰囲気の中ゆっくりとお参りをいたしました。こちらのお寺には五劫思惟（ごこうしゆい）阿弥陀仏がおられ、その特徴的なお姿に心が安らぎました。また、幕末期には会津藩主松平容保が京都守護職本陣を置いた寺院もあります。法然上人ゆかりの浄土宗最初の寺院を参拝させていただくことは、浄土真宗門信徒である私にとっても意義深いものとなりました。

金戒光明寺から徒歩で移動し、聖護院御殿荘にて昼食をいただきました。美味しい料理と美しいお庭を堪能し、慶讃法要に参加するため本願寺へと移動。広々とした境内は全国から集まつた門信徒の方々で大変賑わつておりました。法要が始まるとこれだけたくさん全国から集まつた門信徒の皆様と一緒に法要に参加する機会に恵まれたことを感謝しながら、お念佛を称えておりました。

信行寺の団体参拝に初めて参加させていただきました。その「初めて」が五十年に一度の親鸞聖人御生誕・立教開宗慶讃法要であったことは、本当に貴重でありまさに一生に一度の経験であったと思います。よくよく考えてみると慶讃法要の間はとても落ち着いた気持ちで、自然にお念佛を称えることができていました。周囲の環境を記憶したり描写したりといふ意識が全くなく、ただ落ち着いた気持ちでお勤めをする。まだまだ私には難しいのですが、それができていたということは私にとって大切な一日を過ごすことができたのではないかと思っています。

今回は貴重な機会をいただきありがとうございました。また、お世話いただきました四ヶ寺の皆様にも感謝申し上げます。

「親鸞聖人展」に行く

前 住 職

つて「立教開宗」の時と定めております。以後八百年たつたのです。

京都の国立博物館にて「親鸞聖人生誕八百五十年特別展」が、三月二十五日から五月二十一日までの約二ヶ月間開かれていきました。

陳列された法物は、国宝十一件、重要文化財約七十件を含むという過去最大規模の親鸞展であったようです。令和五年は親鸞聖人が誕生されて八百五十年、立教開宗して八百年の節目の年に当たります。

それで私たちのご本山西本願寺でも、三月から五月にかけて五期に分けての三十日、親鸞聖人生誕八百五十年・立教開宗八百年の法要が勤められました。立教開宗というのは聞きなれない言葉ですが、「淨土真宗の教え」を「宗」として公にされたことです。親鸞聖人は、弥陀の力一つで仏にしてもらえる仏道を明らかにして、「淨土真宗」と宣言されました。「このことをお書きになられたのが「教行信証」という本です。「御本典」と称して淨土真宗の根本聖典としております。この聖典の完成が親鸞聖人五

十二歳の時であつたと推定されますので、これも展示されている法物はいずれも素晴らしいものでした。中でも特に有難かったのは、

◎親鸞聖人自筆の「教行信証」（坂東本）は、晩年に至るまで推敲に推敲を重ねておられたことを紙面が語っています。

◎聖人自筆の書入れがある「阿弥陀経集註」。これは青年のころの勉学の跡が刻みこまれているものです。若い時の真摯な研鑽の姿がしのばれます。

◎「安城の御影」は、聖人八十三歳の御姿が描かれています。弟子の安城に住む専海に与えた寿像です。聖人も「ヨクニタリ」と仰せられたと伝えられています。

御影とは肖像画のことです。

◎「南無不可思議光佛」は、文字が八字なので「八字の名号」という。聖人八十四歳の自筆の名号は、筆の動きを通して、息づかいさえ感じられる有難さがありました。

聖人が非常に身近に感じられた「親鸞展」でした。



「南無阿弥陀仏を聞く」

住職

お寺で育ったある友人が先日こんな話をしてくれました。かつて住職だった父親が生前中よく念佛を称えていたのですが、自分が何か相談しても最後は「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と言つていたと。あの頃は全く理解できなかつたけれど、自分の子供達が成長して実家を離れていった今、遠くで暮らす子供たちのこと想到い「ナンマンダブ」と念佛している自分がいる。親が念佛していた姿を想い出しながら、こういう気持ちだったのかなと思います。

念佛というのは仏さまが「ナモアミダブツ」の声となられた姿です。その声を「聞く」ということが大切な仮縁となつていくのです。

私が四歳くらいの頃に、本堂で法座の時に一緒に座っていると、周りにいるご門徒の方々が日々に「ナンマンダブ」と称えていたのを今でもはつきりと覚えています。それは頭で覚えているというよりも身体で覚えているという感覚です。「ナンマンダブ」と称えておられた声が心のどこかに今も響いています。仏法は毛穴から入つてくると聞いたことがあります。

りますが、声や音は波動ですから聴覚である耳だけではなく身体全体に伝わり心に残ります。

ですから子供の頃には理解していないとも、仏縁の種はしつかりと蒔かれていたのです。それは阿弥陀様の願い「わたしの名を聞いて、わたしに任せてくれよ」という本願の種でもあるのです。

「ナンマンダブツだよ」と父親が言つた言葉もその時は子供には伝わらなくとも、その後のいろんな人生のご縁のなかで、あのとき親の気持ちはこうだつたのかなとしみじみ味わえることもきっとあると思います。

およそ八百二十年前に親鸞聖人が法然上人から受け取られた本願念佛の教えが「ナンマンダブツ」の声の響きとなつて多くの人々の人生に寄り添い、そして今、私のところまで届けられています。

親鸞展では「親鸞の伝えるもの」と題して展示された親鸞聖人八十四歳の自筆の名号の実物を初めて拝見することができました。「南無不可思議光佛」と書かれたお軸は名号本尊として礼拝の対象とされたものです。独特な躍动感あふれる書体からは、親鸞聖人の声が感じられるほどでした。八百年以上のときを超えて届けられている名号の響きがそこにありました。大変有難いご縁でした。

合掌

法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、七月の言葉の説明をします。



正しくものに遇つて 正しく自分を 知らざれてる

この言葉は、十年以上行信教校の校長を務められた利井明弘先生の寺報「常見寺だより」に掲載された法話の一節です。

お念仏の教えに出遇うことで、この私がいかに煩惱を抱えて自己中心的な生き方をしているのかと知させていただく、と味わうことができます。

「念佛者の生き方」においても、「ご門主さまが、「私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただ

くことで、自分本位にしか生きられない無明の存在であることに気づかされ」と示してくださいます。

浄土真宗の僧侶は得度において正信念仏偈などの唱え方を習うわけですが、長年お経を唱えていると、音程やリズムなどそれぞれの癖が出てきます。得度を受けた当初は、同じ音程、スピードで習うわけですが、知らず知らず自分流になってしまします。時々見直す必要があるわけです。

私たちは、両親はじめ、兄弟、祖母祖父、親類、近所の方々、友達、先生やテレビなどの影響を受けながら生きています。その中の様々な経験から、自分なりの価値観や常識などを「ものさし」として身につけ、そしてその「ものさし」が間違いないもの、正しいものと思い込んでいきます。そして、その「ものさし」は、一定ではなく都合によつて変わらるようなご都合主義の「ものさし」でもあります。



信行寺行事予定とご案内



◆本堂納骨お盆法要

八月十六日（水）午後二時～

◆夏期特別法座

八月十八日（金）十一時～十五時

信行寺本堂・礼拝堂にて、昼食をはさんで行います。ご希望の方はお寺に問い合わせ、申し込み下さい。

◆秋の彼岸法要

九月二十三日（土）午後二時～住職

二十四日（日）午後二時～前住職

◆西大谷納骨参拝

十月十五日（日）

納骨・参拝を希望される方は、バスで一緒いたしますので、早めにお寺に問い合わせ、申し込み下さい。

編集委員より

世界仏教婦人大会

四年に一度、浄土真宗本願寺派の世界仏教婦人大会が開かれます。今年五月、一泊二日で爽やかな晴天の京都にて開催されました。親鸞聖人は父として夫として仏道を貫かれ、また妻子も親鸞聖人を支え、共に仏道を歩まれました。この度参加された方の多くは、ハワイ、北米、カナダ、ブラジルへと先祖が移民して、その地で中心となり仏道を実践されてきた子孫の人たちになります。慣れない土地を開拓して家庭を守る暮らし。家庭を営む立場の妻として母としての苦難は、計り知れません。それは、親鸞聖人と恵信尼様の歩みに重なる思いがします。ちいさな家庭から念佛の灯火が社会へひろがります大きな世界へと繋がっていきますように。そして、何気ない暮らしの中にこそ尊さを感じて「和顔愛語」を忘れずに、互いに寄り添い合える存在となれますように。会場いっぱいに次の世代へこの尊い灯火をつないでいきたいという願いがひとつとなりました。言葉は違つても思いはひとつ。そんな出会いを経験いたしました。ありがとうございます。

坊守